

佐藤学先生名護市訪問公開授業

(1) 単元名： 割合

(2) 本時の目標： 割合の基本的な式を使って、問題文をつくることができる。

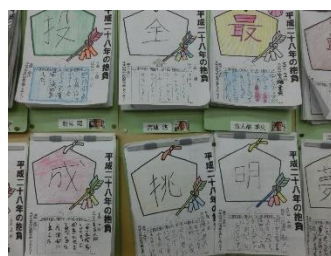
平成27年度の佐藤学先生の沖縄訪問が2月1日の辺土名小学校から始まり、本日は名護市の東江小学校と東江中学校の訪問である。両校が近隣なので1校時に東江小を訪問し、2校時にわずかな時間ながらも、佐藤先生よりアドバイス(学年会にて)をいただいた。

東江小学校では学びの共同体SVの村瀬先生が、市内の小中学校を訪問しながら、学校改革や授業づくりのアドバイスを専任している。ここ東江小でも、5年生の担任であるT先生を中心に「学び合う授業づくり」とインクルーシブ教育実践への挑戦が進められている。本日は、5年2組の算数「割合」の単元を、少人数指導で児童を等質に分けて2つの教室で授業公開が行われた。わたしにとっても東江小学校は初めての訪問であり、緊張感と期待感に揺らいでいたが、素敵な授業を拝見させていただきました。



[静然とした学びは、整然とした環境でしか生まれない]

教室の壁や、ロッカーが美しい。教室は子ども達にとって、一番「安心」できる場所ではなくてはならない。



乱雑な教室環境ではおよそ、教師の授業も

雑である。聖職者の使命が自覚された教師はまず子ども達の作品や頑張りを大切にする(個の尊厳)。さらに、どの教室にも必ず存在する「弱い子」への配慮を忘れない(U-デザイン)、一人残らずすべての子…静かでおとなしい子も「安心」して過ごせる教室とは？



「子どもらしく」とは、明るい元気なあいさつや返事ができる子に「らしさ」を象徴する風潮があるが果たしてそうだろうか。公立の小中学校においては、おとなしくて静かな子も同じく共存できる場ではなくてはならない、ましてや保護者や家庭に様々な特殊な事情を抱えながら、学校を自分の心の寄りどころにしている子も少なくない。パブリックは一人残らずすべての子に「安心」を準備するところではなければならない、これが学校の使命でもある。

[授業導入] うまい教師ほど授業の入り口にこだわる。下手な教師ほど終わり方にこだわる。

本時の問題づくりのために、授業は子ども達の興味・関心を喚起するであろう、身近な生活の中から学びの材料を準備した。野球、サッカー、お菓子、バレーボール、衣食のチラシ等。どれも間違いなく子ども達の意欲を喚起する。



本時ではグループで1枚の写真を選び、その写真をテーマに問題をつくるのが目標になる。何をテーマにするかは「話し合い」である。授業は子ども達をつかんだ。

[導入からグループへ] グループに写真を選択させていよいよグループへ。

写真①、授業者が本時の学習の流れや、グループでの活動について説明する。はじめに写真を見せて野球やサッカー、チラシを見ることで児童の早く自分たちでやりたいテンションは、上がっている。



写真①

授業者の説明が始まった。弱い児童にとって一番苦手とする時間である。

優しい授業者は、「大丈夫?」「分かった?」などのくどい説明と確認が繰り返される。子どもが1分ごとに落ちていく。学び合う授業では、授業開始から5分以内にグループやペアによる活動に下ろしたい。写真②、グループ



写真②

に課題が下りた瞬間に向かい合い互いの探究が始まった。すべての児童が違和感なく向かい合っている。



【協同的グループ活動】 本時はグループで1問作成するがテーマである。

少人数によって分けられた2つの教室とも、遠慮なく対話が交わされている。教科書の問題文を参考にして考えるグループがほとんどであった。これも一つモデリングと言っていい。主導権を持ったリーダーがグループを仕切りあっさりまとまるグループもあるが、なかなかまとまらないグループも当然ある。みんな自分の考えを反映させたいのであろう。対応できるデザインとしては、子ども各々にワークシートを持たせ各々の問題文を作成させてみたかった。

写真①②、教師の行為の目的はなに？ じっくりその目的を踏まえたい。



写真①



写真②

【支援(ケア)する】 写真①、学び合いに躓きを察した授業者が、例えば先生だったら…と例を示した。この判断は授業者しかわからない。ケアや支援は、正解に導くヒントを提供することではない。躓く子を仲間とつなぎ、仲間からヒントを得る知恵と勇気を持たせることである。

写真②、こちらでも子どもが発表した。題意の説明は教師が預かった。「これはどの量を求める問題文ですか、グループで考えて？」



写真①



写真②

【3枚の写真】 「学びの共同体における授業づくりって何から始めたらいいですか？」よくある質問である。わたしは迷わず「聴き合う関係づくりからです。」と回答する。さらに「聴く」はこれまで子どもによる「先生の話の聴き方の指導」であったが私は真逆である。3枚の写真の子ども達の目、仲間の発言や、教師に向けられた目線です。「聴き合う関係」はお互いを支え合う最大の行為です。なぜこの子達がこの目線でいられるか。それは、教師が日常的にこの子達の話に耳を傾けてよく聴いてあげている姿が鏡となって映し出されているのです(鏡の法則)。聴き方の手本は教室の中の大人である教師が示していかなければなりません。日常の学校生活すべてにおいて教師がどれだけ子どもの声を「聴く」ことができるかがカギとなってきます。授業、休み時間、放課後等すべての生活のなかで「聴き合う」ことです。



T先生、授業公開ありがとうございました。素敵な仲間たちですね。みんなが遠慮なく「きき合い」「支え合って」いました。一人もグループに背を向けたり逃避する子はいませんでした。学校改革は授業改革からです、授業が変われば子どもが変わります。子どもが変われば教室が変わります。校長先生を中心にT先生の周囲の同僚からでも挑戦してみてください。協力は惜しみません。素敵な授業ありがとうございました。

1月30日沖縄タイムス、琉球新報の2社の新聞で沖縄の貧困率が記載された。すさまじい驚きの数字である。これほどに・・・改めて、私の胸の内に迫るものがある。ある大学の先生が雑談の中で「『学力の格差』は本当に沖縄の教育問題だろうか？」と発言されたことを思い出した。世界のデータから診ても貧困と学力は比例の傾向を示すという。沖縄の貧困は全国の2倍である。この状況でよくも全国学テにおいて順位を獲得したものだ。さらにわたしが胸を痛くするのはこの矛盾した結果を得るためのリスクがどこに向けられていたかである。

名護市や東江小でも対岸の火事ではない、深刻な事情を抱え困難を乗り越えて学校に頼ってくる児童生徒が存在している事実がある。

何の罪もない彼らに学校や教師は、行政は・・・すべての子ども達が平等で幸福を追求する権利を有しているといえるだろうか。

